

収量が高く豆腐に利用できる ダイズ新品種「そらみずき」

ダイズの自給率は食品用に限っても 2 割程度で、食料安全保障の観点から自給率の向上は喫緊の課題です。そこで農研機構は、収量が高い米国品種と加工適性が高い日本品種との交配から、収量が高く豆腐に利用できるダイズ品種「そらみずき」を育成しました。現地実証試験の結果から、「そらみずき」は関東～近畿地域が栽培適地で、これまでの品種と比較して 3 割以上の多収が見込めます。また、両品種とも発生が増えている葉焼病に対する抵抗性や莢がはじけにくい性質（難裂莢性）を有するという特長を持っています。本品種の普及が進むことで国産ダイズの安定供給や自給率向上に貢献することが期待できます。

☆ 技術の概要

1. 「そらみずき」は「作系 76 号」（後の「フクユタカ A1 号」）、米国品種の「UA4805」を交配親とする組合せから育成された品種です。
2. 茨城県内の現地実証試験では比較品種の「里のほほえみ」より平均で 67%多収、三重県および兵庫県内における現地実証試験では「フクユタカ」より平均で 55%多収であったことから、栽培適地は関東～近畿地域です（図 1）。
3. 裂莢性は“難”であり、温暖化で発生が増えてきた葉焼病に対しても“抵抗性”です。
4. 粗タンパク含有率は「フクユタカ」と比較してやや低く、百粒重は 20g 程度でやや小粒であるが、実需者による豆腐加工適性の評価では豆腐の原料として利用可能であると評価されました。

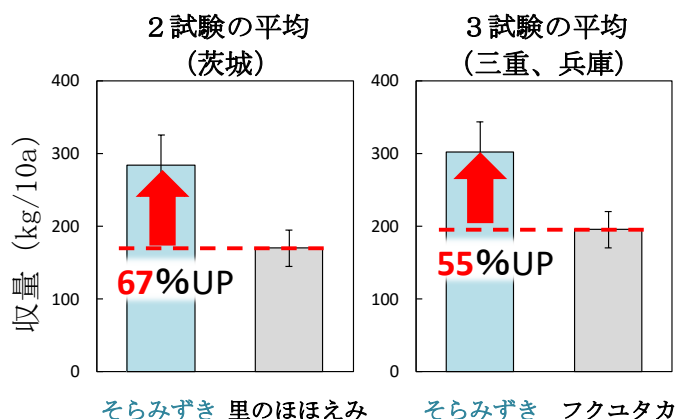


図 1 現地実証試験（約30a規模）でのコンバイン収量の比較

☆ 活用面での留意点

1. 「そらみずき」はダイズモザイクウイルスやダイズシストセンチュウに対して感受性のため、これらの被害履歴のあるほ場での作付けを避けてください。

* 本品種は農研機構「国際競争力強化技術開発プロジェクト」の支援により育成しました。
（農研機構 作物研究部門 畑作物先端育種研究領域 加藤 信）